

主 題：神の人 2

聖書箇所：テモテへの手紙第一 6章11-12節

パウロはテモテを「神の人」と呼びました。それはテモテがあのもーセやダビデやエリヤなどの預言者たちと同じように、霊的な人、霊的なリーダーだったからです。時代に関係なく霊的な人、信仰的な人、信仰が成長している人、信仰が成熟している人、それが「神の人」です。確かに、このメッセージは霊的リーダーであったテモテに対してパウロが与えたものです。しかし、このメッセージは彼に留まるだけでなく、私たちすべての信仰者に対するメッセージでもあります。神学者のフィーバート博士はこのように言います。「この神の人とはリーダーとしての責任をもっているすべての成長したキリスト者に適用できる」と。ですから、今現在、教会で様々なリーダーとして労しているあなたに対して、また、今、リーダーでなくても信仰が成長しているあなたに対して、パウロは、そして、神はこのメッセージを与えてくださるのです。パウロはここにテモテに対して神の人としてふさわしい生き方を継続して行くようにと願ってこの命令を与えています。そして、この生き方こそ、時代に関係なく、信仰の勇者である神の人たちが生きた生き方そのものでした。前回、私たちはこの「神の人」はどんな生き方をするのかを学びました。簡単に振り返ってみましょう。先ず、パウロは二つのことを言いました。

神の人はこのようなことを追い求めてはならないと言い、そして、こういうものを追い求めなさいと、否定的なことから肯定的なことに話を進めていました。

☆神の人にふさわしい生き方

1. 追い求めてはならないもの＝それは10節にあるように「金銭を愛すること」でした。すでに見たように、お金が問題だと言っているのではなく、お金を愛することが問題だと言います。問題はお金ではなくて、今もっているもの、今与えられているものに満足しないことに問題があるのです。だから、もっとお金を得ようとします。そこに本当の満足があると思うからです。しかし、お金を得たとしてもそれによって与えられる満足は一時的なものです。そのような生き方をしているなら、いつの間にかそのお金の虜になってしまうことは私たちがよく知っています。お金が一番大切である、お金が神よりも大切であると。ですから、パウロはここで最も大切な神以外のものを愛することに問題があると言っているのです。それが何であっても、そのようなものは避けなければならない、しかも、継続してそれらから離れ続けて行くことが必要だと言います。なぜなら、私たちはそのようなものに近づくほどにそれらに誘惑されてしまうからです。それが最初にパウロが教えたことです。

2. 追い求めるもの＝二つ目にパウロが教えたことは、今度は変わってあなたはこのようなものを熱心に追い求めて行きなさいと六つのことを挙げました。(1) 正しさ：正しさがあなたの特徴となるようにと言います。神の前にあなたは正しくなければなりませんと言います。しかもパウロは、テモテに対して、信仰のリーダーたち、クリスチャンであるあなたに対しても、神に似た正しい者になって行きなさいと言います。神は正しいお方です。罪のまったくない、汚れたところのまったくないお方です。そのような方に似るようにと聖霊は私たちを変え続けているのです。だから、パウロは正しい神に似た者になり続けて行きなさいと命じているのです。あなたの目的においても、動機においても、思いにおいても、考えにおいても、想像においても、行動においても、すべての点で正しいものになって行きなさいと、それがパウロがテモテに教えたことです。それが神の人、霊的な人だからです。(2) 敬虔：神に対して畏敬の念をもちなさいと言います。神へのふさわしい心の態度、それをもっていなさいと、神を心から敬うように、神を心から恐れて従って行くように、神を心から慎み仕え崇めて行くようにと言います。

(3) 信仰：どんなときにもこの主を信頼し続けなさい、神のご計画、みわざ、みこころを疑ってはならないと言います。(4) 愛：私たちが神を愛する者に変えられれば変えられるほど、私たちはその愛をもって人を愛する者になります。(5) 忍耐：耐え忍ぶことです。特に、この時代、彼らは様々な迫害を受けていました。信仰者であるがゆえにいろいろな迫害を受けました。そのことをパウロはここで話すのです。つらいことを粘り強くもちこたえて耐えて行きなさい、キリストに逆らい続けるこの世の人々からの迫害や困難の中であって、勇敢に忍耐をもち続けなさい、まだギブアップするには早いと言うのです。(6) 柔和：優しく穏やか、とげとげしいところのないもの柔らかな様子、態度です。ギリシャ語の辞典では性質などが穏やかで優しいと訳されています。このように人に対して接して行きなさい、あなたの敵であっても、あなたを迫害する人であっても、そのような態度で接して行きなさいと言います。それが神の人と呼ばれるのにふさわしい生き方なのです。このことばは、前にも言ったように「謙遜」という意味をもったことばでもあります。プライド、高慢の反対です。

私たちの生活はこのプライドとの戦いではないでしょうか？プライドは私たちにとって深刻な問題ではないでしょうか？すぐに、知らず知らずのうちに私たちは高慢になってしまっています。すぐに人を見下したり、人をさばいたりしてしまっています。どんなにすばらしい信仰者でもこの問題を日々経験するものです。憶えておられますか？モーセとモーセの兄姉とのやりとりを…。民数記の中に記されている出来事ですが、モーセの兄であったアロンと姉のミリヤムのことです。民数記12：1から出て来ます。「そのとき、ミリヤムはアロンといっしょに、モーセがめとっていたクシュ人の女のことで彼を非難した。モーセがクシュ人の女をめとっていたからである。」、ここに「モーセがめとっていたクシュ人の女のことで」「モーセがクシュ人の女をめとっていた」と同じことが繰り返されています。クシュ人とはエチオピア人のことですが、モーセは妻を亡くした後、彼女をめとったのでしょうか。このみことばはそのことに関してミリヤムとアロンがモーセを非難したと言います。ところが、この文をよく見ると、これは過去のことではなくごく最近のことだと分かります。モーセが彼女をめとったことを彼らは非難したというのです。ところが、2節を見ると「彼らは言った。「主はただモーセとだけ話されたのでしょうか。私たちとも話されたのではないのでしょうか。」主はこれを聞かれた。」とあります。おかしい流れだと思われませんか？モーセがめとったクシュ人の女のことで彼らはモーセを非難しました。その次に彼らは「主はただモーセとだけ話されたのでしょうか。私たちとも話されたのではないのでしょうか。」と言います。このように話が展開して行きます。なぜなら、実はこれが彼らが心の中にもち続けていた問題だったからです。つまり、このミリヤムはモーセが常に神に用いられている、常に、神のメッセンジャーとして使われている様子を見て妬む気持ちをもつのです。それが彼女の心の中にずっとあったのです。ですから、「アロンとミリヤム」と書かず「ミリヤムとアロン」と書いているのは、そのような思いをもっていたのがミリヤムだったからです。そして、アロンを巻き込んで二人でモーセを非難するのです。というのは、この妻をめとったことが彼らの怒りをぶつける口実となったのです。危険なことです。私たちがそのような間違っただけの思いをもち続けるなら、必ず、それは間違っただけの形で出て来ます。モーセへの妬み、なぜモーセばかり用いられて私は用いられないのかと…。プライドです。ですから、3節には「さて、モーセという人は、地上のだれにもまさって非常に謙遜であった。」ということばが出て来ます。なぜでしょう？つまり、ミリヤムとアロンにはプライドの問題があったのです。私たちに付いて回るこのプライドという問題、私たちはいったいどうすればこれに勝利することができるのでしょうか？私たちに神との正しい関係が不可欠です。私たちに必要なことは、この地上を歩んでいる限り私たちはこのすばらしい神を知り続けて行くことです。なぜなら、私たちが神のことを知れば私たちは自分のことが分かって来ます。自分がいかに愚かであり、いかに罪深い存在であるかが明らかになって来ます。ですから、本当に神を正しく深く知っている人は、皆謙遜な人です。なぜなら、自分の何も誇れないということを知っているからです。自分を他人と比較するのではなく、神の目で自分を見たとき、何一つ自慢できない、何一つ誇れないということを知っているから、自然に謙虚な者に神がしてくださるのです。このプライドにあふれた高慢な態度、生き方はその人の主に対する信仰を現わしています。

もう一つ、このような話があります。モーセが12人のスパイをカナンの地に送りました。彼らが戻って来て、これから攻め上ろうというカナンの地からの報告をイスラエルの民が受けたときのことを思い出してください。10人のスパイたちはこのように言います。「彼らは探って来た地について、イスラエル人に悪く言いふらして言った。「私たちが行き巡って探った地は、その住民を食い尽くす地だ。私たちがそこで見た民はみな、背の高い者たちだ。そこで、私たちはネフィリム人、ネフィリム人のアナク人を見た。私たちに自分がいなごのように見えたり、彼らにもそう見えたことだろう。」(民数記13：32-33)。つまり、10人のスパイたちは「とんでもない、カナンの地に入って彼らを征服するなど不可能だ、だってそこには巨人が住んでいる、無理だ！」と言ったのです。そうすると、14：1-4「全会衆は大声をあげて叫び、民はその夜、泣き明かした。：2 イスラエル人はみな、モーセとアロンにつぶやき、全会衆は彼らに言った。「私たちはエジプトの地で死んでいたらよかったのに。できれば、この荒野で死んだほうがまだ。：3 なぜ主は、私たちがこの地に導いて来て、剣で倒そうとされるのか。私たちの妻子は、さらわれてしまうのに。エジプトに帰ったほうが、私たちにとって良くはないか。」：4 そして互いに言った。「さあ、私たちは、ひとりのかしらを立ててエジプトに帰ろう。」と、民はこのように言いました。エジプトの地にいたときには彼らは神の前に声を上げて「神さま、どうぞ私たちを助けてください」と叫んでそのように助けられた彼らが、しかも、エジプトの地を出たとき水が与えられパンが与えられ、そして、紅海が真っ二つに分かれるという奇蹟を見たにも関わらず、神の守りを経験したにも関わらず、彼らはこのように神に対してつぶやくのです。そのときに神は何と言われたのでしょうか？11節「主はモーセに仰せられた。「この民はいつまでわたしを侮めるのか。わたしがこの民の間で行なったすべてのしるしにもかかわらず、いつまでわたしを信じないのか。」と、彼らは私を侮っていると神は言われるのです。不信仰が神を侮ることをもたらし、そして、このような批判へと発展して行くのです。私たちが神の前に謙虚に歩んで行くためには、私たちは自らの心をしつ

かり吟味しなければいけません。どのような態度をもって神の前に立っているかです。どのように私たちが神を見ているかです。

イエスはこのようなことを言われました。マタイ 11:29「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。」と。「わたしは心優しく、へりくだっている…」、相手を敬って自らを卑下し謙遜するということです。イエスは言われました。すべてのものを造られすべてのものを生かしておられる創造主なる真の神が人としてこの世に来られ、この方はへりくだって仕える者だった、イエスご自身の生き方は私たちの模範です。イエスは私たちに完璧な模範を示されました。すべての被造物から崇められてしかるべき神が、へりくだって仕える者になった、それは主イエス・キリストが父なる神のみこころを常に行なおうとしておられるなら、それが神が望んでおられることだからです。そのような人に神は私たちを変えて行こうとするのです。高慢で自分のことを自慢し続けていた私たちが神によって変えられて、神の前に誇るのはあなたしかいませんという、そのような者に私たちは変えられて行くのです。旧約聖書の最後、マラキ書 1:6にこのように記されています。「子は父を敬い、しもべはその主人を敬う。もし、わたしが父であるなら、どこに、わたしへの尊敬があるのか。もし、わたしが主人であるなら、どこに、わたしへの恐れがあるのか。」と、ここで神はおもしろいことを言われました。子どもは父親を尊敬する、しもべはその主人を敬う、では、なぜ、あなたは神であるわたしを敬わないのか、どこにわたしへの尊敬があるのかと。新改訳聖書では「わたしへの恐れ」とありますが、この「恐れ」は畏敬のことです。神を心から敬うということです。神が問うておられるのは、どのような心の態度をもってあなたはわたしに向かってくるのか、どんな心の態度をもって私に接しているのかです。神と接するにふさわしい心の態度を私たちはもたなければいけません。パウロはこのテモテに対して「柔和」と言いました。謙遜を求めなさいと言いました。私たち自身、自らに問いかけてみなければいけないことは、信仰をもってから今日まで私の信仰は成長しているかどうかです。神をより深く知ることを願いながら歩んでいるかどうかです。神に対する知識は増し加わっているかどうかです。私はどのような心の態度をもって神と接しているかどうか、どのような心の態度をもって神と歩んでいるかどうかです。

パウロはテモテに対して、神の人テモテよ、神の前に正しくあり続けて行きなさい、神の前を正しく歩み続けて行きなさいと、そのことを教えたのです。12節のみことばを見ると、このような生き方をすることについてパウロはその理由を上げています。なぜ、私たちはこのような生き方をするのか、なぜ、このようなものを追い求め、どうしてこのような間違っただけのものから離れて行くべきなのか…。

☆なぜ、私たちはこのように歩むべきなのか？

それがクリスチャンのために定められた生き方だからです。12節を見てください。「信仰の戦いを勇敢に戦い、…」、パウロが言いたいことは、実は、あなたはそのために救われているのだ、クリスチャン生活はいろいろな戦いの連続だ、神が私たちイエス・キリストを信じた者に与えられた、また、備えられた生活は戦いのある生活だからということです。IIテモテ 2:3でパウロはこのように言います。「キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをともしてください。」と、つまり、私たちはキリストの兵士であり、この地上にあって戦い続けているのです。同じIIテモテ 3:12には「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」とあります。「迫害を受けます」と私たちにほもう約束されているのです。もし、あなたがこの地上にあって神の前に忠実に生きて、信仰生活において成長して行こうとするなら、必ず、世の中であって摩擦が出て来る、様々な迫害を受ける、家族からも友人たちからも職場からもいろいろな迫害を経験すると、それが神が約束された私たちクリスチャンの信仰生活の歩みなのです。そこでパウロは「信仰の戦いを勇敢に戦い」なさいと言います。私たちはすでに六つの徳を見てきました。このような正しいものを求めて生きなさい、かつてのようにこの世のものを求めて生きる生き方から、神に喜ばれるものを求めて生きる生き方へ、そのように生まれ変わったのだから、そのように正しく生き続けなさいと言うのです。しかも、彼は信仰の戦いをただ戦いなさいと言ったのではありません、「勇敢に」戦いなさいと言います。

「勇敢に」とは、立派に、見事にという意味で、いい加減ではなく立派にやり遂げなさいということなのです。ここで使われている「戦い」ということば、この動詞は、福音のため困難や危険の中であって苦闘するという意味です。ここでは「兵士」というたとえが使われていますが、兵士が勝つために何度敗北しても何とか勝利しようと作戦を練って向かうように、あなたもキリストの兵士として勝利を得るために前進し続けなさいと言うのです。また、このことばは兵士だけでなく、競技者に対しても使うことばです。競技者が勝利を得るために並々ならぬ努力をします。少し記録が落ちたからといってそれを止めるのではなく、彼らは前に進んで行こうとします。良い記録を出そうとします、勝利しようと一生懸命頑張る、そのようなことばがここで使われているのです。パウロは言います。救われたあなたには戦いが待っているから、その戦いを勇気をもって立派に見事に戦い続けて行きなさい、大変だけど、しんどい

けれど、わたしがともにいるから戦い続けなさいと。そのような人生へとあなたは招き入れられたのです。サタンに従っているときはサタンは邪魔しません。でも、神を信じ、神に救われたあなたにはサタンが敵として様々なものをもってあなたの信仰を弱らせようとします。あなたが神の方を向かないように、あなたが落ち込むようにと働くのです。だから、パウロは「神の人よ、信仰の戦いを勇敢に戦い続けて行きなさい」と、そのような命令を与えたのです。

次のみことばを見てください。「**永遠のいのちを獲得しなさい。**」とあります。パウロはテモテが救われていないと思っていたのでしょうか？そんなことはありません。そうでなければ「神の人」などとは言いません。テモテが間違いなく信仰をもっていることをパウロは知っています。では、パウロはイエス・キリストを信じて救いをいただいた人がその救いを失うと思っていたのでしょうか？いいえ、パウロが記したのを見て行くと、イエスを信じた人、神の恵みによって救われた人は、その救いを永遠に失うことはありません。永遠に神の子です。罪は完全に赦されました。では、パウロは何を言わんとしたのでしょうか？この「**獲得しなさい**」と記されていることば、これは「**捉えなさい**」ということばです。しかもこの時制は、もうすでにテモテがそれを捉えているということをパウロは知っています。ですから、不定過去という時制を使うことによって、それはもうすでにテモテの中に起こったこと、テモテはもうそれを獲得したと言っているのです。ところが、私たちがもう少し見なければいけないのは「**獲得**」ということばです。これは「手で捕らえる」という意味をもったことばですが、パウロはここで永遠のいのちの現実、与えられたその永遠のいのちの現実、そのすばらしさをしっかり捉えなさいと言っているのです。別の言い方をすると、永遠のいのちをいただいた者として、それにふさわしく生きて行きなさいと、そのように言っているのです。永遠のいのちをいただいた者として、永遠のいのちをいただいていることを明らかにしなさい、そのように生きなさいということをパウロは言うのです。ギリシャ語の専門家ヴァインはその辞書の中で「その所有しているものに含まれるすべての恩恵、特権や責任を実地に当てなさいと、そういうことを言っているのだ」と言います。神からいただいた恵みをいただいたと言うだけでなく、それを実際の生活に適用して行きなさいと言うのです。ムーディー教会の牧師でもあったアイアンサイドはこのように言います。「日々の生活において永遠のいのちを実際的なものにするようにとの勧めだ」と。つまり、彼が言うのは、クリスチャンであれば永遠のいのちをもっていないかのような生き方をしてはいけないということです。クリスチャンなら、神から永遠のいのちをいただいた者としてそれにふさわしい生き方をしなさい、というのがここでパウロがテモテに教えたことです。与えられている永遠のいのちがどんなにすばらしいものなのか、あなたは自らの生き方をもって明らかに示して行きなさいと、それがパウロが命じたことです。

だから、私たちはこの世の楽しみを求めて生きないのです。この世からの称賛などはどうでもいいのです。この世の富を求めて生きるのでもありません。私たちは何のために生きているのでしょうか？大企業に入るためでもないし、有名な学校に入るためでもありません。人から羨まれるようなものを手に入れるために生きているのでもありません。私たちはしっかりとこの地上ではなく、その先の永遠に目を留めて生きるのです。神からほめられること、よくやったと言っただけのこと、それを楽しみにしながら、それを目標にしながら私たちは今を生きるのです。モーセはそのようにして生きたのです。ヘブル人への手紙11章を見てください。11：24から「**信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、**」**：25 はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。**」**：26 彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と見ました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。」**、「**エジプトの宝**」はこの地上における最高の宝です。その宝をモーセは自分のために使うことができたのです。確かに、非常に裕福なところに神はモーセを置かれました。ところが、そのモーセがどのような選択をしたのかということがこのみことばに記されています。モーセは比較したのです。この地上における最高の宝と、25節には「**神の民とともに苦しむこと**」、26節には「**キリストのゆえに受けるそしりを**」とあり、それらと比較したのです。もちろん、モーセがイエスを知っていたということではありません。彼は救い主キリストの到来を信じていました。つまり、ここでモーセには選択肢があったのです。富を愛して自分のために使い続けて行くのか、それとも、神を信じる者として神に従って行くのか、モーセは富よりも信仰ゆえに受ける非難を、信仰ゆえに悪口を言われることを選択したのです。すごいことです。私たちはどこかで妥協点を見つけるかもしれませんが。私たちはそのような富を見てはいません。モーセはそれを手にしながら彼はそれよりも信仰ゆえに受ける苦しみを選択したのです。しかも、ここで使われていることば、「**彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と見ました。**」、この地上の最高の富よりも信仰者として受ける苦しみのほうがはるかにすぐれた富と思った、この「**見ました**」ということばはただ思っていたというのではなく、注意深く考えた上での結論ということばです。彼はよく考えた上で何が価値あるものか何が大切なのかを考えて、本当に正しいものの価値あるものを選択したということです。そのような

目を彼はもっていたのです。しかも、26節を見てください。「彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。」、彼がそのような選択ができたのは報いをしっかり覚えたからです。神からのほうび、報酬ということです。「目を離さなかった」、しっかりそれを見つめていたと言います。つまり、モーセは最後の日のことを覚えていたのです。神の正しい審判が下る日、神から私たち信仰者としての生き方に対してのほうび、報いをいただく日、その日をしっかりと覚えて今どのように生きるかを考えたのです。だから、彼は今の時間を無駄に過ごそうとしなかった、今の時間を永遠に残ることのないもののために費やそうとしなかったのです。皆さん、どんなにお金を得ても物を得ても名誉を得ても死んだら終わりです。それらはどこに持って行くのでしょうか？私たちはその後神とともに永遠を過ごすのです。私たちが覚えなければいけないことは、永遠に残らない富のために生きることよりも、永遠に残る富のために生きることです。イエスはこのように言われました。「自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。：20 自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。」（マタイ6：19-20）。本当に永遠に価値あるもののために生きることです。そのような生き方を私たちはしているでしょうか？モーセは永遠を見たのです。神の前に立つ日を覚えたのです。そして、神が私に問われることは、いくら儲けたではない、どんな仕事をしたかでもない、学歴についてでもない、あなたは私に対して忠実だったかということです。そのことを知っていたからモーセは神の前に忠実に歩もうとし、彼は地上の空しい富、私たちに誘惑し間違った方向へ導いて行こうとするこの富に目を留めて空しい人生を過ごすのではなく、神のために生きることによって天に宝を積み、永遠に価値ある生き方を選択してそのように生きたのです。だから、モーセは祝福されたのです。信仰の勇者と呼ばれるのです。

パウロはこのテモテに対して、テモテよ、あなたが何のために生きているのか、そのことをしっかりと覚えて、永遠のいのちを神からいただいた者であることをあなたの生き方をもって示して行きなさい、このキリストこそが本当の希望であることを示しなさいと、そのことを勧めたのです。そして、そのように生きる人が「神の人」です。そのような人が霊的な人なのです。パウロはこのテモテが信仰者として成長していること、神の人として成長していることを見て喜びました。もう一度6：12に戻って見てください。最後にこのように言っています。「あなたはこのために召され、また、多くの証人たちの前でりっぱな告白をしました。」と。パウロはテモテが様々な困難の中であって、忠実に、見るべきものをしっかりと見て、永遠に天に宝を積む生き方をしているのを見て喜びました。だから、彼は言います。テモテよ、そのために私たちは召されたのだ、神があなたを罪から救い出し、そして、この地上に置いてくださっているその目的は、私たちがこのすばらしい神のことを明らかにすることだ、あなたはそのことを知っていること。

そして、パウロはもう一つのことを覚えていました。テモテが多くの証人たちの前で立派な告白をしたと、彼は公に自分の信仰を告白したのです。恐らく、バプテスマのことでしょう。そのことは記されていませんが、パウロは知っていました。バプテスマのときに信仰者は自分の信仰を明らかにします。このような恵みをもって神は私を救ってくださったということを目にすることを明らかにするのです。パウロはそのことを思っていて喜んでいました。確かに、Iテモテ4：14やIIテモテ1：9を見るとそこにはテモテに対する按手礼のことが記されています。そのときにも人々の前で彼自身の信仰が明らかにされています。Iテモテ4：14「長老たちによる按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある聖霊の賜物を軽んじてはいけません。」、IIテモテ1：6「それですから、私はあなたに注意したいのです。私の按手をもってあなたのうちに与えられた神の賜物を、再び燃え立たせてください。」。パウロはテモテが自分の信仰を人々の前で明らかにした、そのことを思い出し、彼が本当にこの救いにあずかっていることを実際の生活において示していることを見て喜んでいました。パウロはテモテに対して、私はあなたが神によって救いに導かれたことを喜んでいて知っているし、あなたが人々の前で証をしたことを覚えている、あなたはどのように生きて、どのように神の人として信仰の勇者として成長していることを見て私は喜んでいて、だから、テモテよ、そのように歩み続けて行きなさい、私たちの信仰の戦いはまだ終わっていないから、戦いはこれからもまだ続くのだからと…。これがパウロがテモテに与えたメッセージであり、そして、私たちに与えたメッセージです。皆さん、神があなたに言われていることは正しく歩み続けて行きなさいということです。信仰を神からいただいた者として、神を心から誇り愛する者として、あなたはどのように生きているかです。あなたはこのキリストのすばらしさを証するために生きておられるのか、それとも、この地上で欲しいものを手に入れるために一生懸命労しておられるのか…？永遠に価値あるもののために生きることです。神の人としてあなたは成長して行くことです。「神の人」と呼ばれるのにふさわしい者としてあなたは成長して行くことです。

「神の人」とはどんな人でしょう。最後にもう一度思い出してみましよう。(1) 神を心から愛する人です。その人は神によって救われたことを知っているゆえに、そのことを心から神に感謝し続けている

人です。私たちはイエス・キリストの十字架を思い起こすたびに心は感動します。神がここまで私のためにしてくださった、そのことを思うたびに私たちの心は感動します。でも、悲しいこと恐ろしいことは、その感動が一瞬のうちに終わってしまうことです。なぜなら、私たちはいつまでもキリストの十字架を覚えていないからです。そうすると、私たちの口から神に対する感謝があつという間に消えてしまいます。そのようなことを皆さんも経験されたでしょう？神の人は神のことを心から愛するゆえに、すばらしい救いのみわざを感謝し続けている人です。神を愛するゆえに神の命令に忠実に従い続けて行こうとします。神を愛するというのは、私たちがそのように口にするからそれでいいのではなく、それを実践することが必要なのです。神が期待しておられるのは、私たちが何を言うのかではなく、私たちがどんな人になるかです。神を愛するとは神の命令を守ることです。神を愛する人はすべてのことを主のために心から喜んでしようとする人です。神を愛する人は喜んで主に仕えて行こうとする人です。主に仕えるゆえに、家庭の中にあっても教会の中にあっても人々に仕えて行こうとします。また、神を愛する人は喜んで犠牲的にささげようとする人です。神を愛する人は喜んでもっと神に用いていただきたいと願っている人です。つまり、神を愛するというのは間違いなく私たちの日々の生活に反映されるものです。(2) 神を心から畏れている人です。神を心から敬うゆえに神が憎まれる罪から離れ、神が愛され喜ばれるみこころに従って行こうとします。救われた者としてそれにふさわしい生き方をして行こうと、そのように思いそのように生きている人です。(3) 神の人は神に希望をおいている人です。この世のことやこの世の中から救い出された者として、永遠に価値あるもののために生きる人です。いつでも主にお会いする日、そのときを思いつつ生きる人です。今日、私たちはイエスの前に立たされるかもしれない、私たちの地上での生活がこれまでと言われる可能性もあります。皆さん、備えができていますか？イエスの前に立つ準備ができていますか？神の人というのには、キリストをしっかりと見上げ、永遠に価値あるもののために時間を使って行こうとする人です。それは明日ではありません、今です。今、そのように生きよと言われるのです。

パウロはテモテに願いました。神の人として歩み続けなさいと。そして、それはあなたへのメッセージです。神の人であるクリスチャンの皆さん、どうぞ、そのように生きてください。何度も言うように、問題は、神が何と言われるかを知ることではありません。それは私たちはもう見てきました。どのように生きるかを示してくださったことをあなたが始めるかどうかです。そのように生き始めるかどうか、それが問題です。あなたはいつからそれを始めますか？今からすることです。なぜなら、明日はないかもしれないからです。神はあわれみによって私たちに今日をくださいました。神の人として生きなさいと。そのように生きて行きましょう。それは私たちのためではありません。私たちを救ってくださったすばらしい神のためです。